

柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 70 号
(大 祭)

令和6年12月3日



奉祝

御幣帛御下賜記念

神垣も

新たになりて

みゆかりの

秩父のさとわ

いよよ栄えむ

(続) インバウンドの落とし穴

秩父神社 宮司 蘭 田 建
神道政治連盟埼玉県本部副部長

本来の地域の特徴や生活に根差した風習や習慣から生まれたものは、長い歴史の中で先祖が育んできた大切な財産だ。特に神社仏閣の参道などは、その地域の活性化を目指すものであつて氏子さんが潤うためであろう。(これは今、深刻に考えなければなりません、日本全国にみ



られる負の事例といえよう) 流行りの民泊の普及により静かな住宅街に観光客が往来し、夜間の騒音やゴミのポイ捨て、車道の占領や事故が多発している。外国人観光客が増加の一途をたどれば、簡単にオーバーツーリズムの現象に陥るのは自明の理だ。さらに言葉もマナーも文化の違いで判らない、となればどうなるのか。宗教上の問題として、神社仏閣のように日本古来の信仰と伝統文化を内在する施設では、どうすべきか。

すでに多くの外国人が参拝に来られているが、一部のマナーの悪い観光客(これは残念ながら作法を知らない日本人を含む) 落書きや立入禁止区域への侵入、信仰への冒瀆的行為、または境内地での飲み食いや外国語表記の看板乱立による借景の悪化など、枚挙にいとまがない。案内所や看板は必要かなど今後どういった対処が必要なのか・・・これらの現象は、経済が絡まる故に大変悩ましいものであるが、外国人に対しては観光税の導入も検討しつつ、インバウンドのメカニズムと功罪を多角的、包括的に調査分析し、秩父地域全体(行政や第三セクターを絡め)に当てはめて考察し、解決していかねばなるまい。否定的に捉えるのではなく、サステナブルツーリズムを念頭に秩父の魅力を発信しながらルール作りをしていく必要がある。

解説 秩父神社(68)

杉山 正司

◆ 続・秩父神社を巡る刀剣(二)
今回研磨が完了した脇差を改めて拝見して、新たに気づいたことなどの考察を紹介しよう。

折返銘の謎

第六十三号でも紹介したが、この脇差の最大の特徴は、折返銘となつていることである。折返された銘は、茎の表側を削つて茎の厚さを半分にし、茎裏側の銘を折返している。折返された裏側の銘文は、長船勝光と叔父の宗光の作者銘が刻まれている。

何故、作者銘が残されたのだろうか。本来作者銘は、表側に刻まれるのだが、本脇差では裏銘となつている。作者銘を裏側に刻む例が皆無ではないが、勝光・宗光合作の例からも異例となる。

両工の作例として著名な刀として、坂本龍馬の差料がある。坂本家に伝来し、令和元年に高知県立坂本龍馬記念館に寄贈さ

五口の比較

	国宝短刀	御物太刀	国宝太刀	秩父脇差	波賀太刀
作者	長船景光	長船景光・景政	長船景光・景政	長船勝光・宗光	長船勝光
刀身文字	秩父大菩薩	秩父太菩薩			八幡大菩薩
梵字	大威徳明王	毘沙門天		一髻文殊 愛染明王	阿弥陀如来 千手観音菩薩 如意輪観音菩薩
奉納者(願主)		大河原入道沙弥藏蓮 左衛門尉時基	大河原左衛門尉時基		大河原備中守之清
年紀	1323	1325	1329	(1489~1540)	1540
奉納先	秩父神社	秩父神社	廣峯神社	秩父神社	波賀八幡神社

れた脇差である。当社と同じ脇差で、五二・七センチメートルとやや短寸であるものの、刀身表裏に「五大刀菩薩」と「八幡大菩薩」の刀身彫刻が施されており、梵字と文字の相違はあるものの、神仏を刻むという類似性のある脇差である。表銘は

「備前国住長船二郎左衛門尉勝光左京進宗光」と当社脇差と酷似している。裏銘には「永正二年八月吉日(一五〇五)の年紀が刻まれ、勝光・宗光合作刀期の下限ともされる。

それでは、当社の脇差に表銘として年紀が刻まれていたのだろうか。可能性はゼロではないが、年紀を刻まない刀剣もある中で、わざわざ表に年紀を刻むことは考え難い。

そうすると表銘が、作刀当初は刻まれていた可能性が出てくる。どのような銘が刻まれていたのだろうか。

秩父神社を巡る五口の刀剣を表にしたものである。この表から、いくつかの類似性が指摘できる。

- 作者は、長船派の刀工である。
- 刀身彫刻、または梵字

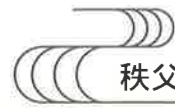
さらに短刀は、茎が短寸で銘はほとんど刻めないが、脇差は裏銘があるように表銘が刻まれていた可能性がある。しかも

この表からは、奉納者であり願主の大河原氏の存在が俄然クローズ・アップされてくる。おそらく折返銘となる迄は、表に願主大河原氏の可能性が出てくる。それも波賀八幡神社の太刀も勝光作であることから、先祖の例に倣って先行して本願地の氏神である秩父神社に奉納したと考えるのが自然ではないだろうか。

勝光・宗光合作刀剣は、宗光が勝光の叔父であることから、年齢を考えると当然勝光単独で作刀した波賀八幡神社の太刀より、当社脇差が先行して作刀し奉納されたといえる。

したがって、脇差の表裏には、願主として「丹治大河原」の文字があつたはずであり、さらに想像逞しくするならば「備中守之清」の名が刻まれていたのではないだろうか。

おそらく神社として、やや縁が遠くなった大河原氏よりも、名工の名を惜しんだため、裏銘残しの折返銘としたのであろう。それでは、何故折返銘にする必要があつたのか、次号で考えていこう。



秩父神社縁起と知知夫国

		やごころおもいかねのみこと 八意思兼命	ににぎのみこと 天孫降臨に際し、邇邇芸命に従い降臨 あめのしたはるのみこと 子の天下春命が知知夫国造の先祖になったと伝わる
人皇代 10代 崇神天皇 前 86年	くにのみやつこ 知知夫国 初代 国造 知知夫彦命	八意思兼命を奉斎 →武蔵国の成立以前より栄えた、知知夫国の総社となる	
允恭天皇	狭手男臣	知知夫彦命を併せ奉斎	
皇極天皇 645年	大化の改新 以降、知知夫国は「武蔵国」の一部となる →国府（現：東京都府中市）に鎮座する大國魂神社の第四之宮の御祭神は秩父神		
文武天皇 701年	大宝律令（国家統治の根本法典）制定		
元明天皇 713年	知知夫→「秩父」へ		
清和天皇 陽成天皇 859年 927年	秩父総社として関東屈指の古社へ		
朱雀天皇 村上天皇 938年 947年	平良文「上野国染谷川の合戦」 平将門 vs 平国香（常陸大権・鎮守府将軍） →平国香へ加勢 この際、群馬県花園村に鎮まる「妙見菩薩」の加護 →以来、厚く信仰 後年秩父に居の際、花園村より「妙見社」を勧請 →秩父の 妙見社創建 （社記「風土記」より） 良文：下総国へ 子孫：秩父に土着→秩父平氏とよばれ、武士団の形成		
【中世】 (鎌倉、室町、安土桃山時代) 13～16世紀			
土御門天皇 1198年	秩父では……		
順徳天皇 1221年	古来の秩父神社に対する信仰 秩父平氏一族が奉ずる妙見信仰		
四条天皇 1235年	落雷により社殿焼失		
花園天皇 1314年	社殿落成+遷宮（『秩父妙見宮造営次第』正和2年より）		
正親町天皇 1569年	信玄焼 武田信玄による焼き討ち 甲斐→秩父へ攻め入る。その際、社領を失い、社殿を烏有に帰す		
1573年	氏子らにより仮殿造営 北条氏邦（鉢形城主）、再建に着手+社領7石 →しかし 鉢形城落城により、北条氏による再建ならず		
1590年	徳川家康 の命により、 本殿造営→拝殿・幣殿		
1591年	遷座祭斎行 現在の社殿 となる 1592（天正20年）の棟札、昭和30年 県指定		
明治天皇 1868年	明治維新 神仏分離を機に…… 秩父神社 の旧号に復す		
昭和天皇 1928年	国幣小社列格（昭和3年） ちちぶのみやすひとしんのう		
1953年	秩父宮雍仁親王 を配祀		

習合 → **秩父妙見宮**

妙見大菩薩
↓
あめのみなかぬしのかみ
天之御中主神



御社殿保存修理工事を終えて

宮司 蘭田 建

「御鎮座二一〇〇年事業」が平成二十六年より始まり、その記念事業の第二企画として社殿彫刻の彩色改修並びに建具の新調がはじまりました。

現在、当社の本殿は一五六九年にそれまでの社殿が武田信玄によって焼かれ、後に徳川家康の命により一五九二年に建て直されたものです。それから幣殿拝殿が増築され、三代将軍家光公から五代将軍綱吉公までの間で、江戸初期の琳派の流れを組む見事な彫刻が施され、流権現造りの建築様式になりました。

江戸の後期になると、いくつかの改築を重ね、現在の拝殿より面積が広く軒が反り上がる豪壮な建築となりました。しかし、昭和四十一年の台風により、御神木である銀杏の幹が折れ、拝殿東側の屋根が倒壊したため、すぐに地元の社寺建築家の指導により社殿の解体と改修工事が始まりました。この時、江戸初期の建築様式に戻そうとする機運が高まり、寛政二年の秩父神社の図面を基に、合計六年の歳月をかけ、昭和四十七年に現在の御社殿の姿となりました。

それから半世紀が経ち、初期の壮麗な御社殿彫刻の彩色が剥落激しく、損傷も目立ちはじめました。そのため『新たな未来に在来工法の技術の継承と、伝統文化を承継する』を目的と定め、

アトキンソン社長と多くの議論を重ね、二一〇〇年記念事業をもって改修する事となりました。数ある業者の中で、当社では小西美術工芸社の豊富な知識と実績を信頼し、わが国の最高の技術集団と捉え（当社彫刻を氏子中の至宝として後世に生かしてもらうことが当社累代の神職として義務であると考え）依頼しました。

当時は振り返りますと、まず東西南北を四面に分けて、東面より地元業者の協力により足場が架けられ、齊藤工務部長の差配により彫刻の取り外しから始まりました。彫刻によって日光の工房に引き取られ、残りの構造材や特殊な彫刻類の彩色は、佐藤親方の手に任せられました。社殿をめぐる夥しい彫刻群は戦国時代から四百年以上の時を刻み、迫力のあるものばかりでした。しかしこれらは五十年の歳月と風雪による影響で、かなり剥落が進んでおりましたので（保存修理委員会では、保存状態の良い箇所は一部残してもいいのではないかと論議されました）当初計画通り、全てにおいて職人さんにより、根気よく古い彩色の掻き落としがなされました。驚いたことに、塗料に包まれていた生地の樫の木目は大変美しく、計算高く彫り込まれ、高い技術と経験からなるその佇まいは、十六世紀の職人の魂が宿っている事が伝わってきました。よって本来は無垢であった彫刻に、後から壮麗な彩色を施したのだという事も分かったのです。この後、新たに下塗りも施され、壮麗かつ緻密な彩色が幾重にも施されていきます。そのあまりに素晴らしい出来栄は、この文章では説明し難いため、どうか実物をご拝覧いただきますようお願い致します。



本殿遷座祭③

代並びに矢尾会長の御参列を頂き、仮殿に安置されていた御神体を御本殿奥深くへとお遷し申し上げました。

御皇室におかせられては夙に敬神崇祖の念に篤く、かつての国家管理の下で官幣幣社及び別格官幣社に列した二百十八の御社への御幣帛御下賜の伝統に基づき、格別なる思召しをもって、当社の本殿遷座祭に際し御幣帛を御下賜あそばさされました。

当社の歴史を顧みますと、平安時代の典籍であります『日本三代実録』の記述に、貞観四年(西暦八六二年) 清和天皇様の御



奉幣祭参進の儀

代に神階正五位下から正五位上へと進み、次の陽成天皇の御代である貞観十三年(西暦八七一年)に従四位下、更に元慶二年(西暦八七八年) 従四位上から正四位下へと進み、清和・陽成両天皇様に御祝意を頂いた記録がございます。

明治以降にあつては、神社は「国家の宗祀」として公の管理に属することとなり、中でも官幣社及び国幣社並びに別格官幣社は国の所管となりました。昭和



本殿遷座祭④

三年に当社は国幣小社に列格し国の所管となりましたが、戦後神社を取り巻く制度が一新され、新たに設立された神社本庁傘下の宗教法人として今日まで歩んで参りました。

この間、昭和四十五年十月二十五日には災害復興を終えた本殿遷座祭の折に、昭和天皇様より御幣帛を賜り、更に平成二十六年の御鎮座二一〇〇年式年大祭に際して、現在の上皇陛下より御幣帛を賜りました。そして今回、記念事業の完遂に伴う本



本殿遷座祭①

去る平成二十六年、当社は御鎮座二一〇〇年式年大祭を斎行し、畏くも時の天皇陛下現在の上皇陛下より御奉幣を賜り、平成二十六年十二月三日の例大祭に合わせて御鎮座二一〇〇年式年大祭を斎行致しました。

これを契機として、御鎮座二一〇〇年奉祝事業奉賛会を組織し、矢尾直秀様に会長にご就任頂き、募財活動並びに

◆ 本殿遷座祭並びに奉幣祭斎行について



本殿遷座祭②

各種記念事業に取り組んで参りました。第一期事業である秩父公園内の御旅所・亀の子石周辺整備事業を終え、第二期事業である御社殿並びに彫刻群の保存修理事業を進めて参りましたが、令和六年九月末をもって工事が無事終了し、続く十月三十日午後五時より浄閑の中、神職のほか笠鉦・屋台町代表、氏子青年会幹部会員の奉仕のもと、大総

殿遷座祭に際し、今上陛下より御幣帛を賜りました。昭和天皇様から数えて実に三代にわたり御幣帛、御祝意を賜りますことは秩父神社の長い歴史においても初めての慶事であり、あらためて御聖恩に感謝を申し上げますと共に、御皇室の弥栄を心より祈り申し上げます。

一〇〇年に一度となる大仕事を無事に終えることができましたのも、偏に氏子崇敬者皆様のご理解とご協力の賜物であり、大神様の御神徳のもとご関係皆様様の愈々のご健勝ご多幸並びに秩父地域の更なる発展を心より祈念申し上げます。

【表紙解説】

今回の表紙は、奉祝奉幣祭に奉奏された柞乃舞と致しました。

平成二十六年の御鎮座二一〇〇年を奉祝して制作され、作曲・作舞は元神社本庁祭祀舞講師であった故東儀季一郎氏によるもので、歌詞は秩父宮妃勢津子殿下の御献歌となっております。

梟ふくろうだより



◆奉納報告



当社御田植祭保存会有志の方々より、十二月六日の新穀奉獻感謝祭に合わせ新米の御奉納を頂きました。

奉納された新米は、御田植祭保存会会員である横田様の田んぼで、六月二日のお田植えから十月五日の稲刈り、十月二十六日脱穀、袋詰め作業まで会員有志及び、多くの子供たちが携わ



つています。

古来より大切な日本の文化として受け継がれてきた稲作を体験することで、お米への感謝の気持ちを育み、秩父地域の稲作文化継承を目的に精力的に活動されています。

◆ラジオ放送「秩父神社だより」

秩父地域の情報を伝えるちちぶエムにて、毎週土曜日午前十一時より「秩父神社だより」が放送されています。



が放送されています。当社にまつわる歴史や文化について宮司が紹介しております。どうぞご視聴ください。

◆秩父神社妙見講

自 令和 六年 七月
至 令和 六年十一月

- 七月二十八日 幸手妙見講
- 高濱彰男講元外 三十七名
- 九月一日 小鹿野講
- 逸見照三講元外 四十九名
- 九月七日 荒川妙見講
- 浅海忠講元外 百二名

九月八日 中村講

岩田雄一講元外 百五十五名

九月八日 上町講

浜中啓一講元外 二百十二名

九月二十九日 上宮地講

大島耕造講元外 百二十六名

十月十九日 桜木講

濱田雄司講元外 二十二名

十月二十日 中町講

久保忠太郎講元外 九十四名

十月二十三日 東町妙見講

木村普一講元外 八十七名

十一月九日 番場妙見講

今井明講元外 七十四名

十一月九日 野坂講

中村正義講元外 百八名

本年より小鹿野講逸見照三様と東町妙見講木村普一様が新たに講元に就任されました。どうぞ宜しくお願い致します。

◆柞乃杜神前結婚式報告

秩父市下宮地町 玉川真吾・菱様
 秩父市下影森 内田匡紀・浩未様
 横瀬町横瀬 久保田真弘・早矢様
 未永く幸せなご家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

◆職員辞令

実習生 吉田有臣 主典を命ず
(十月一日付)

編集後記

■ここに社報第七十号(冬祭り号)をお届けいたします。

■人口減少を始めとして、現代社会は様々な変化を迎えようとしています。そうした中に於いて、地域の伝統祭祀を大切にしていた日本人の心根に寄り添って神社は続いて参りました。古を稽え今を照らす(稽古照今)教えの下、本殿遷座祭・奉祝奉幣祭の祭祀が厳修出来たことは、次世代に繋げる意味で大変重要な事でありました。改めて、この事業に関わった全ての皆様に感謝申し上げます。



※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。

令和六年(二〇二四)十二月三日
 編集 秩父神社社務所
 〒366-0004 埼玉県秩父市番場町一三
 TEL(〇四九四)二二一〇二六二
 FAX(〇四九四)二四一五五九六
 印刷所 有限会社 拓文社印刷所
 〒366-0004 秩父市東町二七一八